強者の戦略　続・京都大学といふところ　第２回　研究室配属の心得

皆様こんにちは。研伸館化学科の古谷勇馬です。雨が嫌いな私にとって、最近の天気はまことに辛いものですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？京都大学といふところ、第 2 回です。今回は 3 回生からでしたね。

多くの大学では､3 回生になると履修講座は専門科目一色になります。私の属していた学科は学年人数が 100 人を越えていることからも分かるように、非常に多くの研究室が属している学科です。ですから、専門科目でも、自分が最終的に研究することとは関係のない専門科目も多く履修することができました（というよりは、卒業に必要な単位の関係上そうせざるを得なかった)。例えば、蔬菜花卉園芸学（｢辛くないトウガラシ」で有名。一度食べたことがあるがピーマンかと思えるくらい全然辛くなかった）や、植物病理学（植物のウィルスに関する学問）など。また、当時は動物系に進むことは決めていたのですが、魚類にするか家畜にするか迷っていたので、これらについてはかなり多くの講座を履修しました。一番面白かったのが、畜産の講義。ここでレポートが課されたのですが、それが何と「100ｇ400 円の肉と 100g800 円の肉を食べ比べてレポートせよ」というもの。それで、実際にやってみたのですが、とても美味しいのは分かるのですが、いまいち違いが分からない（笑)。普段もっと安い肉を食べていたので、どちらもすごく上等に感じてしまったのですね。

また、学生実験についても、各研究室の先生方がリレーの形でされるので、様々な分野の実験に触れることができました。将来使うスタンダードな実験手法もあったのですが、中にはすごくユニークな実験もありました。世界に 2 台しかない分析装置で実験をしたり、雨天の翌日に増水した鴨川で恐怖と隣りあわせで水質調査のために河川水の採取をしたり、土壌に含まれる元素を分析するのに晩の 21 時までかかったり（実験は 13:00 から始まる！)。あと、学生実験をきっかけにクラス内の友好関係はより強固になります。実験作業の協力とか、レポートの共有とか（とある友人は実験の単位の半分は私でできていると言いました。バファリンじゃあるまいし（笑)）

そして､3 回生でのビッグイベントは何かというと、そう、研究室配属です。他の大学でもおおむねそうだと思いますが、研究室に配属される人数には上限があります。それで、もし定員オーバーになったらどうするのかというと、基本的には話し合いで解決、ということになるのですが、将来がかかっているのだから、みんなそう簡単に譲らない。だから、結局くじ引きやじゃんけんで決めることになってしまうのですね。将来やるべき研究がくじ引きで決まるのはどうも理不尽な気がするのですが、仕方ないですね・・・。

研究室配属では、事前に希望調査が行われます。それで、特定の研究室に人が集中するのはよくある話ですが、そこから定員内におさめるために学生間で交渉や駆け引きが始まります（笑)。幸い、自分の場合はそこまで熾烈な戦いに巻き込まれることはなかったのですが、ある年は結構ドロドロとしたバトルがあったと聞きます・・・やはり、クラス内でちゃんと信頼関係は築いておくことが大事ですね（苦笑)。

サークルの方は、ぼちぼちやっていました。とはいえ、おそらく自分の人生で一番楽器に触れていたときだったので、自分の楽器の腕が飛躍的に上昇したのはこの時期だと思います。そして、ずっと憧れだったベースにも手を出し始めました。結局、個人的に楽しむ程度で、ベーシストとして他の人と一緒に活動するのは先の話になるのですが・・・。

大学入学当初は､私は畜産いいな､牧場いいな､という気持ちだったのですが、大学に入って色々な講義を聴くうちに、もっと基礎研究に近いこと

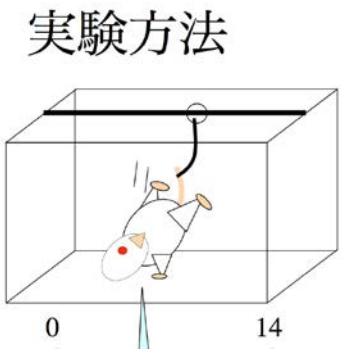
がやりたい、という思いが強くなって、2 つに研究室を絞ったあと、最終的には研究室の雰囲気で決めました。研究室の配属にあたって重要なのは、もちろん「自分がやりたいこと」ができるにこしたことはないのですが、それと同じくらい、いや、それ以上に大事なのは「研究室の雰囲気や人間関係」だと思います。だって、学部卒で就職するならともかく、大学院に進学するとなると、研究室を変えない限りは、1 日の大半をそこで過ごすことになるのですよ？たとえ自分のやりたいことができたとしても、そこでの人間関係がギスギスしていて、精神的に参るような環境だったら辛いじゃないですか（ちなみに私が選ばなかったもう一方の研究室はそういうところでは断じてありません。念のため）。私もそうだったのですが、大学生のうちは中長期的なスパンで物事を見るという能力がそこまで高くありません。どうしても目先のこと、すなわち、自分のいまやりたいことしか考えることができない。だからこそ、このようなアドバイスは説教くさいところがあるかもしれませんが、特にこれから大学生になる皆さんにはしっかりと受け止めていただきたいと思います。

研究室の生活は、研究室によって様々です。朝から晩まで実験漬けを強いられるところもあれば、完全なる放任主義なところもあります。自分がどちらの環境にフィットするかという観点で研究室を選ぶのも良いかもしれません。私が配属した研究室は後者でした。後者は徹底した自己管理が求められるので、これはこれでシビアなところがあるのですが・・・。また、研究室ではそれぞれユニークな行事があります。新入生歓迎会とか忘年会とか追い出しコンパとか・・・私のところはありませんでしたが、研究室メンバーで旅行に行くことも結構あるようです。まるでサークルみたいですね（笑）。

研究室に配属されて間もないうちは、当然右も左も分からないので、何をすればいいのか分からない状況です。後から振り返ってみて後悔の念も込めて思うことですが、研究室に配属されてから、というよりは、一般的に新しい環境に身をおいたときには、まずとにかくインプットをすることが大事だと思います。私の場合、英語の論文を読んで発表することを、大学の授業でも、研究室主催のゼミでも強いられたのですが、それ以上にもっとたくさんの英語の論文を読むべきだと思います。もちろん、日本語で書かれた論文もあるのですが、英語で書かれた論文の方がはるかに多いので、英語の論文を読むことは不可避です。よく「1 日 1 本の論文を読め」と言われるのですがまさにその通り。自分は実践できなかったのですが、それくらいのレベルでインプットをどんどんしていくのが良いと思います。そうすると、インプットが不十分なうちは霧の中を歩くように実験していたのが、すごく見通しよくできるようになると思います。そのためには英文をスピーディーに読んでいくスキルを身につけなければなりません。高校の頃みたいに、英文を読んで訳して・・・なんて悠長なことはやっていられない。ですから、大学 1 回生の語学の授業でも英文を読んでいく機会はありますが、できれば受験生のときから、そういう速読のスキルを身につけていくことが大事だと思います。幸いに、論文で出てくる構文や表現は定型的なものであり、突飛なものもないので、そこさえつかめれば、後は単語力の問題です。しかしこれも、分野が同じであれば、よく出てくる単語は決まっているので、そこをしっかりとおさえていけば大丈夫だと思います。

先に述べた英語の論文を読む発表では、同時にプレゼン能力も鍛えられます。パワーポイントを使って発表しなければならないので、明快なスライドの作り方も身につけることができます。私はパワーポイントの図形でマウスの絵を作ったこともあります（下図）。研究室内では「パワポ職人」と呼ばれたものです（笑）。今ではこのスキルはス

パルタン(研伸館の映像授業)のスライド作成に活かされています。



　さて、次回は 4 回生の話をしていきたいと思います。ここで私は研究室史に名を残す（？）発明をします。乞うご期待！